

H. D. Thoreau と W. E. Channing II との関係

川 津 孝 四

Concord に住んで H. D. Thoreau と当時関係の深かった文人達は色々あるが、William Ellery Channing II くらい彼と親しかった者はない。Thoreau は Concord 生えぬきの人であり、Channing は Boston から移転して来たものではあったが二人が親しく知り合ってからと云うものは殆んど毎日の様に連れだって散歩をしたり、語り合ったり、野生の植物の観察をしたり地質を調査したり一緒に徒歩旅行にも出掛けたり、やがて二人とも講演をしたり、本を出したり、然も常に互に理解し合い助け合っていた。また二人は互に色々と影響している。Thoreau の方が追々世間にその真価を高く認められてゆくに対して、Channing は自ら天才詩人として任じた程には世間から高く評価されなかったとは云え Concord の文人達を色々な意味で引き立たせた人物であったし、彼の書いた Thoreau の伝記、Thoreau, the Poet-Naturalist に依って広く知られ、Thoreau の作品中にも色々作中の人物となったり、その作品の一部や lines が引用されたりしているので、Thoreau 研究に当って極めて重大な関係のある人物である。二人が友情を深めたのは 1842 年の夏 Channing が Emerson 家に滞在、続いて秋と冬に Concord を訪れた時に始まっている。二人は共に 1817 年生れ、Thoreau の方が幾らか早く生れていたが同年生れと云うことは二人を共鳴させた一つの原因であったろう。Channing 家が Concord に移って来たのは 1843 年の四月で、その家を世話したのは Thoreau で、Emerson の庭に隣する家であった。Thoreau はその頃 Emerson の兄 William の子供達の家庭教師となるため Staten Island へ出発しようとしていた。然し Concord に森や野を愛好する今一人の者が住

む様になったことは非常に嬉しかった。

(Thoreau to the Emersons, July 8, 1843; Harding.)

Channing は Concord にそれ以来殆んど60年、Frank Sanborn の西北の部屋で死ぬ迄 Concord を己が内と考えた。Emerson や Alcott や Hawthorne や義姉の Margaret Fuller や Thomas Wentworth Higginson と交わり、Thoreau とは誰よりも親しく、共に森や河へ行き、遠く Cape Cod や Canada までも一緒に旅行したり、殆んど毎日の様に連れだっていた。従って互に影響する所も少くなかった様であった。

Thoreau と Channing が感情的に一致していたのを理解するには、Walden が出版された時より前の、二人が共に無責任な怠け者で各々の家族にとって厄介者であり、町の人からは信用のない者と見なされていた頃からの事をずっと見なければならぬ。1850年代の Concord の人達はこの二人の内の一人が将来予言者の様に思われる時が来るなどとは思ひもしなかつただろう。Thoreau に対する批判圧迫は殊に強かつたであろう。村人の見た所では彼は好機を掴もうと努力する様子もなかつた。倅しい家族が犠牲を払って彼に大学教育を受けさせたのに、彼の方では特にそれに報いる様子もなかつた。父の John は鉛筆製造と云う利益ある仕事を漸く築きあげつつあつたが、若し普通のアメリカ人の息子なら喜んでそれを発展さすことに専心したか知れない。然し Henry はそうではなかつた。週に僅か二月位しか助力しなかつた。然も彼の不注意で森火事を起して幾エーカーの材木を灰にしてしまったこともある。後に彼は測量師として時折収入があつたし、有能な鉛筆製造人であり、雑役人であつた様によい測量師でもあつたことは明かであつた。然し世間から見て彼は野心を欠ぎ、家族に対しても責任を果していない様に見えたに違ひない。彼が小鳥の生活や野の花の様子を見に毎日の様にそつと出かけて行って、自分の年取つた父をして一家を支えるために材木と黒鉛の中で働かせていたのだから、村人が彼のことをどんなに思ったかは直ぐに想像されよう。1846年に

Thoreau が poll tax 支払拒絶をしたのは彼なりの理由があったのだが世間から見ればやはり彼の無責任と見たであろう。

Channing の方は Boston から来たよそ者であったし、その家庭の事情も Thoreau とは非常に異っていた。William Ellery の父 Dr. Walter Channing は Harvard Medical School の Dean だった人だし、彼と同名の伯父の Dr. William Ellery Channing はユニテリアン派の有名な牧師で Transcendentalism への道を開いた人であったし、その弟 Edward Tyrrell Channing は Harvard 大学で修辞学教授を勤め Emerson や Thoreau を教えた人でもあった。その他 Ellery の父方母方の人々は殆んど全て立派な人々であった。その光輝ある家族や親戚の人々に比して Ellery は余りに頼なく思われた。

Walden が出版された頃及びその後は特に Ellery と Henry との結びつきは一層強くなった。背後の人達がささやいたり、かぶりを振ったりしているのを二人は共に意識していた。一日がかりの散歩に出掛けた時何軒の百姓家に見付からずに通れるかを見る game を二人がやった事がある。

(Canby, Thoreau, 310—11)

それから見ても二人が世間の眼に無関心であった訳でないことは分る。然し二人は唯の怠け者であったのではなく、各々異ってはいるが、自然の観察や自己探求に内的な精神活動があったのは云う迄もない。

「Ellery は Henry を知って以来、小さいポケットブックをさげて、各々の新しい植物の名前やその花を見つけた最初の日を好んで書きつけた」。

(Emerson, Journal, June 13, 1852.)

それまで学徒としても駄目だったし、百姓も出来ず、ジャーナリスト、詩人としても思わしくなかった Ellery は今や熱心な 'Observer' の仕事に没頭していた。森や野を好み、暗い沼地を背景にして樺の白い幹の美しさを知り、陽のさす谷間で雲雀の啼く声に恍惚とする様になっていた。1849年から Ellery が Main Street の方の家に移り住み、1850年以後は

Thoreau 家の者もその向いになったので、二人の交際は更に親密になった。仕事の力の入れ方の変化も影響した。Thoreau は草木や生物や地質等自然界の観察の仕事をその expert になる程に熱心にした。

(Canby, Thoreau, 306)

それはその友にも影響した。然し、Channing は Thoreau や Emerson とも同じく自分が科学者ではないことを知っていたので自分が専門的な知識を表わすことに滑稽な喜びを感じた。彼が専門語を知っていることは不釣合だったし、また彼が滑稽に感じたのはその不釣合を自認したためであった。

1844年5月には Channing に子供の Margaret が生れたが彼は nurse の Miss Prescott と口論して、その人が去るまで家を出ていた後帰って来たが人手もなく困っていた。そしてその夏の一部を Thoreau と組んで Berkshires や Catskills へ徒歩旅行をして、ストレスの解消をした。

(W. E. Channing to Margaret, June 27, 1844. Houghton)

1845年3月5日に Channing は当時 Concord に居た Thoreau に書いて曰く。

「私がかつて Briars と名付けたあの野の外この地球には君の為に何も私は見ない。あそこへ出掛けて行って、自分で小屋を建てて、そこで存分に自ら生活する偉大な道を歩み始めなさい」と。

(W.E.C. to Thoreau. Mar, 5, 1845. Harding.)

Channing 自身、土に親しむことを決心していたためでもあろうが、その友の行動をそれだけ期待をもって激励したらしい。Channing と妻 Ellen は二月早々に農場を買う決心をして探し始めた。間もなく Ellery は土地を買ったし、また、Thoreau は Walden Pond のほとりに小舎を自分で建てた。Channing のその土地は Carlisle Road から行くと、村から一哩以上の Punkawtasset Hill の斜面の Brown 農場で、森地と耕地で20エーカーあり、それに彼は600ドル支払った。ここに家を建てて、9月の

初めに移住した。けれども Channing は百姓をする訳でもなし、妻の Ellen もそこでは不便で淋しくもあったので、家が Main Street に面して居り、Sudburg River の岸べに土地が続いている家敷を買って移転した。Thoreau と Channing は共に 1849年10月に Cape Cod を訪づれ、1850年には Canada への旅行をした。尚お Channing は五月に独りで再び Cape へ行っている。Channing の妻 Ellen の姉である Margaret Fuller がその夫や男の子と共に 1880年7月19日に The Marchesa d'Ossoli が Fire Island の岸から sixty rods の所で難破した時に溺死すると云う悲劇的な出来事が起きた。Emerson は直ちに 70 ドルを出して Thoreau と Channing を遭難現場へ向させた。数日間二人は難破物を探して、遺品をもち帰った。

歴史家でもあり詩人でもあった Daniel Ricketson は Thoreau が Walden を出版して以来その本に非常に魅惑されて、Thoreau と知り合い文通で二人は深い友情を作っていたので、1854年のクリスマスには Thoreau を Brooklawn の自宅に招待した。Channing が彼に会ったのは彼が Thoreau の訪問に対する返礼として Concord を訪れた時であった。Concord での最初の滞在は Ricketson にとっては記憶すべきもので、彼は予て Thoreau から Channing のことをよく聞いていたので Channing に会うことは願望の一つであった。

Ellery も Thoreau から彼のことをよく聞いていたので互に語り合うには理想的な仲間と思われた。Thoreau は秋には Ricketson と New Bedford へ行き、帰ってくると Channing に Brooklawn を訪づれる様に告げた。そして Christmas excursion となった。Ricketson も邸内に 'shanty' をもっていたので Channing は訪問した時 'That's your shanty.' と云い、やがてその小舎の炉辺で二人は烟草を吹かせ乍ら Ricketson の言葉で云えば feelosophize したのであった。

1856年の二月に Channing は Ricketson の助力で The New Bedford

Mercury の assistant editor になり、その市に下宿した。そして、Brooklawn の Ricketson の家を度々訪れて愉快的時を過した。然し Channing は下宿している居所を Dorchester の時と同じ様に隠して人に知らせなかつた。然し次第に Concord を度々散策する様になり、1857年の四月には十二日間休暇をとったし、その夏は休暇を二ヶ月も延した。彼の仕事も段々減った様であつた。1856年には一週二三回 Ricketson の小舎へ行つたがその後はその度数も減つた。

1858年の暮頃 Ricketson が The Mercury のオフィスで Channing に二度会つた。それは二週間程離れてではあつたがその間でさえ Channing は Thoreau と一緒に Walden や Fair-haven Hill へ散歩していた。

(Thoreau, Journal, Nov. 30, 1858.)

Thoreau は1858年の六月にはその友 H. G. O. Blake と Monadnock へ登り、そのごつごつした斜面で二夜を過したし、七月には Edward Hoar と white Mountains へ行つたが九月に Cape Aun の砂地を踏んだのは Channing とであつた。

(Thoreau to Ricketson, Oct. 31, 1858; Harding.)

1860年八月二人は共に Monadnock でキャンプした。それは五夜の探険旅行であつた。二人は一日びしょ濡れで登山した。そして、雲の中に Thoreau の古いキャンプ地を見つけた。Henry は大急ぎに針縦の枝で小舎を建てて火を焚いて着物を乾した。朝太陽が濡れた苔にさした時頭上の峯はオリーブ色がかった褐色に輝いた。そこで Channing はそれを Mount of Olives と名づけた。Thoreau は鳥や植物や岩について広汎な notes をつけた。(Thoreau, Journal, Aug. 4-9, 1860. Channing's 'Monadnoc' Journal) (Houghton)

1861年の春、Thoreau が健康の為に西部へ旅行するよう勧められた時、Channing を誘つたが迷うた末行けぬと云うので代りに Horace Mann を連とした。Channing は Niagara Falls で一行に加われるかしれないと暗

示していたが来なかったので Thoreau は失望した。

(Sanborn, Life of Henry David Thoreau, 368-69.)

然し Channing はその効果のない旅行の前後に於いて Thoreau のことを非常に心配していた。それはそれ迄家族に対してももったことのない様な心配であった。

「Channing は非常に忠実に私の世話をした。彼は私の病症をよくみて、私が自分自身を知ってるよりも知っていると彼は云う」と Thoreau は Ricketson へ書いた。

(Thoreau to Ricketson, Mar, 22, 1861; Harding.)

1861年の末頃には Thoreau の健康は快復の見込みもない有様であったが最後の幾月かの間は寝たままで友人達と会い、感覚は鋭く、冗談も云ったりしていたので、毎日見ていた Channing も重大危期を予期していなかった。

本人は Channing に 'It is better some things should end.' などと云っていた。

(Canby, Thoreau, 438.)

遂に1862年5月6日がやって来た。Alcott の家へ行ってその不幸を知らせたのは彼であった。

(Alcott, Journal, May 6, 1862.)

Channing は葬式のお勤めの為に四節のものを書いた。それは悲しみの情がよく表われていた。なお Channing は三つの引用文を棺内に納めた。次のはその一つであった。

Hail to thee, O man, who hast come from the transitory place to the imperishable.

Thoreau の死後故人の原稿を管理していた妹の Sophia は未発表の原稿を出来れば自分一人で編集したかったであろうが、その仕事には全く不馴れだったので Henry と一番親しくしていた者に助けを求める気になった。Channing はそれに正しく適していたと云う訳でもなかったが、編集の仕事の経験もあったので、引受けることになった。斯うして1864年には The Maine Woods を翌年には Cape Cod を出した。The Maine

Woods はよく売れたし、Cape Cod 中に記録された多くの経験は Channing も Thoreau と共にしたのであった。

Thoreau の作品に対する世間の興味が高まったので彼の journals も歓迎される様に思われた。Channing が誰より親しくしていた人の心の記録や生活振りを世に発表し、説明するのに熱心だった事は云う迄もない。1874年に彼が伝記中に Thoreau の日誌の幾分を挿入した後、Sophia は Channing にそれを取られない様に原稿を Public Library に入れる恐れもあったし、Channing と Sophia の間はよくなかった。

(Canby, Thoreau, 441; Sanborn, Recollections II. 394-97.)

Saphia は兄の原稿をどんな編集者にも、どんな伝記家にも任せたくなかったらしい。彼女は Journals 編集の許可を求めていた James T. Fields や Thomas Wentworth Higginson にもその許可を拒んだ。「Henry の人格は非常に含蓄が広いのでそれを描くには多くの人心がいると思う」と彼女は Ricketon へ書いている。

(Ricketson, 155)

そうすると一寸適任者はないことになる。

1865年十月に Channing は Main Street の家売って Middle Street の家へ移った。前の家はこの詩人一人にとっては広過ぎたし、Thoreau 家に近いことも河に近いことも Henry がいなくては全くその意味を失っていた。新しい家は彼の父が彼の為を買ってくれていたのであった。父 Doctor は幼にして母を失った息子 Ellery にやる財産とてなく、こんな風変りな生涯を作り出した責任が自分にもあると感じて、頭を悩ましていたのであった。息子にめったに会わないし、嫁の Ellen は忠実で愛らしい女であり、この父と息子を繋ぐ輪でもあった。文通も間接でそれも Ellery が機械的に月々貰う check だけであった。一軒の家をやったのは父がその愛情と慰撫を表わす最後の努力であった。

Ellery はこの家を非常に喜んでいたがそれはここが Concord Academy であったし、後に 1838年から 1841年迄 Thoreau 兄弟が private school

を開いていた家であったからである。John が若い者達に game を指導している間に Henry が年上の少年達に古典を教えていたのは実にその部屋であった。(Canby, Thoreau, 68.)

その家は学者としての新しい経歴を歩んでいる Channing には励みになる所であった。

Thoreau が亡くなってから Channing は散歩することも少なくなったが時々 Walden Pond や丘や森へ行つて、Thoreau と一緒だった時のことを思い出した。

「何であったか忘れたが、H. が何か小さいことについて話した時、天才の芸術は一寸したことを大きなことに高めるにあると H. がかつて云つたのを思い出す。これは吾々が一緒に外出した最後の頃の事で、Flint's Bridge の近くであった。H. は戸外で起るあらゆる事実については好んで心騒ぎや驚異や驚きを表わしたが、絵や音楽や小説がこんな風に彼を感動させはしなかった……母なる自然が語ったり作ったりするあらゆるものを好むこの自然の子の大へんな好奇心や、絶えざる新鮮さや、わき立つ驚異ほど喜ばしいものはなかった。」

(Channing, Journal, Feb. 27, 1867. Houghton)

1871年に Sanborn が編集し、Emerson が金を出して出版された Channing の blank-verse pastoral の The Wanderer, a Colloquial Poem は彼の長詩中の傑作で、その中の 'Wood' や 'Mountain' や 'Sea' は彼の旅行や親しくした仲間を追想するもので、'The Hermit' や 'Henry's Camp' と題するものもある。Walden に於ける Henry を歌った所はなかなかうまく表現されている。

「正に人類の伝統は今も、こちこちと、
くもの巢のくもの様に、彼の耳をとどした。
そして、今も夢の中に太鼓の音を聞いた。
そして一片の智慧で地球を煽動し、

平和を確保する改革を企んだ。

でも、屢々彼は手から四十雀に餌をやった。

そしてこの隠者の小舎の裏に

自分で家を造つた古い用心深い麝香鼠は彼を少しも警戒しない。

彼は毎日裏口に施物を残して信用されていた。

短い冬の日が急に過ぎ去る時、

空が晴れてると、彼は聞いた小さい湖が唄うのを。

喜びと賛美のよく知ってる調べを。

風神 Aeolus が豎琴をかきならす様に、

また東をふちどる見張の松が

夕方にそのエメラルド色の先を立ててるのを見た。

その間、湖の波の筋一つ一つが全て

哀れっぽい音楽をかなでていた。」

(The Wanderer, 28-29)

Channing は自分を naturalist と称し得るために、その言葉が自分の資格に適する様に妙にこぼつけて云っている。

‘A naturalist is one who does not know nature, i. e. scientifically.’

(Channing, Journal, Aug, 12, 1852.)

でも Channing はその方法がいつも出任せではあったが鋭い観察者であった。1852年の十二月半過ぎの彼の日記中には色々な冬景色に付いて鋭い観察を示している。彼が仕事として熱心にやっている観察記録も仲間達の中には冷評するものもいたろう。Emerson からさえ二度も笑われたことを認めている。(Channing, Journal, June 1. 25, 1852, Houghton)

1853年一月九日の日記を見ると、彼は Walden をあらゆる方面から注意深く note しようと思った。然しそんなもの位つまらぬものはない。それを本にしようと思わず、どんなに沢山書いても大した違いもない。一寸した心覚えとして価値があるのだし、観察の習慣が養われる。この習慣は

絶えず高めなければならない。さもなければ思想や感情が観察者を打ち負かしてしもうから、と書いているし、その年の四月には

‘I have lost in despair all hopes of attaining unto the degree of a naturalist; a natural, I still may pass for.’ (Channing, Journal, Apr. 10, 1853.) と記録している。

その七月末頃には未だ歩いたり、観察をしたりはしていたが日に日に記入することを止めた。覚書は時折になった。自然について notes を作ることはもう profession とは云われなかった。

Thoreau も Channing も度々講演をやっている。Thoreau が初めてやったのは Concord Lyceum で 1838 年であった。彼の講述は誰にでも訴える類のものではなく、ある限られた者にしか理解されないものであった。稀には面白くやることもあったが、概して、声に抑揚もなく、半分は独り言の様だったので、盛んな拍手ではなくて、退屈と欠伸が見られた。でも彼は自分の云い度いことを述べて、聴衆に熟考させる余裕を与えなかった。とは云え Anthony Burns や John Brown を弁護する時には全く別人の様であった。John Brown が 1859 年に奴隷解放運動に熱狂の余り Harper's Ferry の兵器廠を襲って捕えられた時その救援のため Concord 教会で多くの聴衆を前にして演説をした時など全く熱烈なもので、ひどく聴衆を感動させた。例の ‘Plea for John Brown’ である。それは Worcester でも Boston でも繰り返えされ、新聞もそれを掲載した。

Channing が始めて講演したのは Thoreau よりずっと後で、1852 年一月二十一日であった。それは Boston で三回やった内の最初のものであった。題目は「時代の精神」でそれは立派な講演であったけれど余りに早口だったそうである。(Mrs. Fuller to Arthur B. Fuller, Jan. 25. 1852.)

Emerson まだが友人達を訪ねて出席を促すと云った様に Transcendental brethren が力を入れたにも拘らず三回共聴衆は少なかった。Wentworth Higginson に云わせると宣伝が貧弱だったと云うことである。論

より証拠彼の一友が Salem からやって来たのに何処でやるのか掲示も見つからずやりそうな hall を五つも訪ねたが駄目だったとのこと。

(T. w. Higginson to Ellen, Feb, 13, 1852.)

一月二十九日に Channing は Concord Lyceum で 'Society' と題して講演した。それを聴きに行った Fuller 夫人には、聴衆の多くが Emerson の話を期待してやって来たらしく見えたが彼女は聴衆はだまされてはいないと思った様である。そして 'rich in thought, brilliant, and witty.' であったと云っている。

(Mrs. Fuller to Richard F. Fuller, Feb. 1, 1852. Houghton.)

また Thoreau はその夜日記に書いて曰く、

'Perhaps the most original lecture I ever heard. Ever so unexpected, not to be foretold, and so sententious that you could not look at him and take his thought at the same time. You had to give your undivided attention to the thoughts, for you were not assisted by set phrases or modes of speech intervening.....It was all genius, no talent. It required more close attention, more abstraction from surrounding circumstances, than any lecture I have heard.....I cannot associate the lecturer with the companion of my walks. It was from so original and peculiar a point of view, yet just to himself in the main, that I doubt if three in the audience apprehended a tithe that he said.....Other lectures, even the best, in which so much space is given to elaborate development of a few ideas, seemed somewhat meagre in comparison. Yet it would be how much more glorious if talent were added to genius, if there were a just arrangement and development of the thoughts, and each step were not a leap, but he ran a space to take a yet higher leap.' (Thoreau, Journal, Jan. 30. 1852.)

之を要するに非常に独創的な講演だったが風変わりで多くの聴衆には理解し難いものであった。若し天才に加えるに表現の技能があり、その思想をもっとうまく整理発展させたらどんなにかずっと素晴らしいものになったろうと云うのである。

Channing は Providence や Worcester や Fall River, それに恐らく Greenfield でも講演をした。また説教も Plymouth で二回 Abington で一回と都合三回やっているが、自分でも日記に書いている様に聴衆の中には、いねむりする者もあったらしい。

(Channing, Journal, May 2, 1852.)

Dial 誌に掲載した Thoreau の寄稿の中で 'The Art of Life—The Scholar's Calling' は彼の学徒としての生活態度を述べたもので、学徒の生活は self-culture であり、己が個性を充分に開発しなければならない。人格の完成が大事な目的であるから、金銭や職業のためにその目的からはづれてはならない。その目的達成の為に生活は出来るだけ簡易にすべきだし、独居による自己修養が大切だ。真理は体験に依ってこそ本当に理解出来る。思索を大切に、熱誠なることストア学派の如く、自由なること Cynic philosophers の如く、その生活は隠者の如く、外部からの束縛を排し、内部から養うべきだと説いた。これは Thoreau が後々迄も持っていた彼の重要な考え方であった。

1842年後 Margaret Fuller は The Dial の編集を Emerson にゆだねた。そして、当時 Emerson の家に同居していた Thoreau は Emerson を助け、且つ執筆をした。Channing は最も沢山に寄稿したが二人は Emerson の趣味はマサチューセッツの人々や英語国人の趣味に合わないことを知っていた。二人は共に New York の出版者達を訪ねたりした。

Channing は新聞の編集もやったし、詩集を七巻出しても居るが、詩人としては残念乍らあまり成功とは云われぬ。然し彼は Thoreau の最初の伝記を書いた人で、彼の Thoreau, the Poet-Naturalist はその後の

Thoreau の研究者達や伝記家達にとってはなくてはならない非常に重要な種本となっているので、それだけでも Channing は記憶さるべきである。

Thoreau が1862年五月に死んだ後間もなく、Channing は Henry の life を書き始めた。彼はその為に既に長い間、意識的にも無意識的にも準備をしていた。1853年に一つの plan が出来た時にはもとより未だ充分なものなど出来て居らず、Emerson や Thoreau や Alcott や Channing が記録者であったり、対話者であったりする。Concord 及びその地方についての一連の Walks and Talks を Channing の編集で本とする為、当時 Concord の住民となって十年だった Channing は New York や Europe に居て時々不在だったので、知らない所は Thoreau の日記を見て、その中から色々としり取った。その後 Thoreau の最後の病氣中にも日記から写し取って居るし、'Maine Woods' を編集するため Sophia Thoreau を助けている時も Channing は Henry の他の日記の部分を書し取ったのである。こうして Thoreau の生涯の最後の十年か十二年間の日記からは相当多数頁をその原稿の中にとり入れたのであった。

こんな準備の後1863年に出来た Channing の 'Thoreau, the Poet Naturalist' の最初の原稿は134頁であった。

F. B. Sanborn は1863年2月以来 'Boston Commonwealth' 新聞を編集していたし、Miss Thoreau は Henry の未発表の詩数篇を寄稿してもいたが、Channing は自分の原稿の半分を同紙に掲載するため Sanborn 宛に送った。そして1864年初めに掲載し始めた。数週後に文学ものために割り当てられた紙面を二週間他の寄稿者達のために与えたので、Channing は憤慨してその原稿を取り戻してしまった。そのためにその原稿は大方10年間もそのままになっていた。その間に Thoreau の書いたものが沢山に印刷されて評判になって居り、尚お Channing の 'The Wanderer' もある程度世間に知られていた所から1873年の秋に Channing の

書いた Thoreau 伝を一冊の本として初版 1500 冊を出すことになった。
 ‘Thoreau, the Poet-Naturalist’ はかくして世に現われたのであった。これは Channing が 1843 年から 1886 年までの間に出した九冊の本の中で最もよく知られ、最もよく売れた本であった。彼の ‘The Wanderer’ の売れ残りは Boston の大火の時に焼けてしまったけれど、この方はそんな災害も受けず、相当長い月日はかかったが遂に売り切れてしまった。Plymouth の友人 Marston Watson へそれを一冊贈呈するため色々手を廻して探しても見つける事が困難だったと云われている。

(Thoreau, the Poet-Naturalist. XI)

この 1873 年の本を 1863 年の分と比べると随分異った所がある。Channing は最初の原稿をよく調査して、沢山に省略したがそのために残りの部分で不明瞭になった所も色々ある様だし、また Mottoes や allusions や沢山の引用文を入れ、尚お Channing 自身の章句や Thoreau の章句をあちこちに挿入したりした。その印刷が進行していた時、出版者の Niles は Channing が片意地でなかなか希望を入れてくれず、最初予期していたより五十頁位頁数も少ないと云うので Sanborn にも相談して結局頁数を増すことになったがそれは 1853 年の原稿で ‘Country Walking’ と題するもので、その内容は Emerson や Thoreau の日記からの長いもの、実際の会話がついているし、Channing 自身が書いた人物についての sketches や snatches、それに Channing 或は Emerson 作の詩や断片があちこちにある。これは元来他の目的で記録されていたのであったが、その中から Channing は頁数を増やすために、古い版で 67 頁のものに 120 頁増して 187 頁とした。その挿入した場所が元の原稿の最中であるし、難解なものもあるし、編集の方法にもどうかと思われる点もあるし、索引でもなかったら読者は容易について行けない所がある。それでもこの伝記は後の全ての Thoreau の伝記家達や Thoreau の研究者達にとって、非常に大切なものとなった。

この伝記が彼の親友の最初の伝記であったし、本質的に云ってそれは權威あるものであった。と云うのもその源泉をそもそも本源からとっているし、二十年の親交から来ているからであった。Thoreau の伝記家中 Thoreau の生きている人格を知っていた者は他には Frank Sanborn 唯一人だったが Sanborn は友であるよりはむしろ知人程度であった。色々な事柄に密接な関係にあった事と、Thoreau に対して深い愛情を持っていた事以外の角度から測ると Channing が最良のその伝記家だったとは云われない。然し、後の伝記家達は Thoreau の人格の他の色々な面をとらえたり、各々特徴あるよい判断を与えたりしてはいるが、Channing が提供している知識を利用している点に於いて例外はない。

尚おこの 'Thoreau, the Poet-Naturalist' は Sanborn の編集に依って更に多くを加えられている。

Channing は自ら既に prairie で小舎住いの経験を持っていたが、1845年三月 Henry 宛の手紙で Walden に於ける生活を示唆した人こそこの Channing であった。然し Channing は Thoreau の Simplicity の doctrine にすっかり帰依した訳ではなかった。むしろ反対に何でも欲しがり、それもただで欲しがった。そして、Channing の目的は Thoreau の程にはっきりしてなかったけれど二人は共に同じ様な路をたどった。普通の社会生活の面では二人とも失敗者と周囲の者から見られていた。observer としての仕事をやる点に於いて、Channing は Thoreau の影響を強く受けた。然し Thoreau は自然を観察してもその外面的な箇々の情景を印象するだけでなくその奥深い意味をとらえようとした。が Channing にはその印象を記録はしても深い意味をとらえることは出来なかった。詩人として表現をしようとしたが表現形式が整理されてない面が眼についた。

Thoreau は日記に次の様に書いている。

「私の友は演述のある型破り、即ち私がよくそれをやって後悔している向う見ずな、すさまじい表現をする様にそそのかす。即ち私は自分が意図

したよりも、人類が個々人に関して更にはげしく、過度で、皮肉な表現を用いたのに気付くのである。彼に対して、十分に穏かな陳述をするのは困難なことを知るのである。それは私の真面目で変らぬ意見に彼の共鳴を得てないからであると私は思う。彼は paradox や風変りな陳述を求めるし、私は余りにも度々それを彼に与えるのである。」

(Thoreau, Journal, Mar, 12, 1854.)

と書いて居り、こうした病弊が二人に共通な悩みだったことを認めている。

Channing のいつもの弊風を心配した事実は、結局、彼の社会に関する考えや態度を多少とも穏かにしているかしのれない。

Thoreau にはよいマナーを意識して避ける野人的傾向が強かったが、同じ様に粗野であった Channing がある時とった態度に対してこう云っている。

「先日私のボートを借りた二人の青年は河岸から Channing の中庭をそと通って帰って来た。彼等にとっては殆んどそうするしかなかった。然し二人が門を出た時 C は二人の後をシャツ一枚で粗暴に家から歩み出て、二人を閉め出す様に門を閉めた。若し彼が伊太利や仏蘭西でそう云うのに出くわしたら、正しく文句を云われ、その下品さを非難される様な態度であった。」

(Thoreau, Journal, 25, 1853.)

月日が経つと Thoreau も幾らか社交性が増した様である。少くとも 1850年頃の彼の反抗的態度は一層違った所を示した。そして、彼は悪い作法が自分にとって価値あるものとはしなかった。自分の側にいる人の姿に自分の面影を見て襟を正したのであろう。

‘A Week on the Concord and Merrimack Rivers’ 中で Thoreau は Channing を六度引用し、Walden 中では四度引用している。

Thoreau の作の多くは、彼の生き残った友にとっては合作の様に思われたかしのれない。Channing の詩を自由に採用したばかりではなかった。彼自身がしばしばその物語中の一人物であった。‘Walden’ の ‘Former In-

habitants' の中には数度現れてくるが、こう云うのもある。

「最も遠い所から、最も深い雪でも、最も激しいあらしの中でも、吾が宿へ訪ねてくる者は一人の詩人であった。農夫や猟師や通信員や哲学者でさえも尻込みしたか知れないが、何ものも詩人を思い留まらせることは出来なかった。何故なら彼は純粹な愛に依って動いているからだ。誰が彼の去来を予報することが出来よう。ドクターが寝る時でも何日何時でも仕事が彼を呼び出した。吾々は辺構わぬ哄笑で小さい家を鳴りひびかせ、またひどく真面目な話をつぶやいて、Walden の谷が長い間森閑としていた償いをする。これに比べると、Broadway も静かで荒涼たるものであった。適宜の時間の後、規則的に笑声の挨拶をした。それは或はさっき話した事柄或は直ぐ後に来る冗談に構わず関係していたのだろう。吾々は薄い粥をすすり乍ら多くの斬新な人生論を打ちたたてた。それは哲学が要求する明晰を歡樂の利益と結びつけた。」

これに依っても二人が如何に親しい間柄であったかが分るのである。

Cape Cod と A Yankee in Canada では Channing は Thoreau の道連であった。Channing はそれ等の無名の編者であると共にその作中の無名の人物でもあった。Transcendentalist として彼は詩の因襲に、慣重且つ大胆に挑戦したところの最初の group に属していた。實際 Transcendental poets は technique に付いて色々実験をした。rhythms の不規則も rhymes の不正も故意の様にさえ思われる。彼等は他のアメリカの詩人達よりも実験を尊ぶ自由の風潮を創った。勿論芸術である以上規律のない訳はないが、こうした古きを破ろうとする反抗的な仲間の中でも彼は最も規律のない方であった。従って Channing にとっては Transcendentalism は彼の生涯に意義を与えたと共に一方では彼を打ちひしいたとも云える。

'It is not metres, but a metre-making argument that makes a poem.'

(Emerson, Complete Works, III, 9.)

と云って、形式に対して、中身に忠実であることを誓言した Emerson の

教えに Channing は忠実過ぎた恨みがある。と云っても何も Emerson に罪が有るのではない。Channing は訓練を欠いた混乱した処理法故に technique に対する無関心さが強かったのである。Thoreau も相当に詩を作っているが、それ等の詩は内的に見るべき所があるのを見受けるが technique とか韻律とか調べとか云った面では Channing とほぼ同じ様に批判さるべきである。但し Thoreau の本領は散文にあり、その内容にあり、その実践にあったが、Channing のそれは詩にあっただけに、そのマイナスは大きい。また Channing は生来衝動的であったが Emerson から理論的基礎を得て感傷的な面が強くなった。そしてまた彼は他の Transcendentalists にも増して現在の瞬間の為に生きた。そして、Emerson や Thoreau の多くの作品や journals に見る様な人間や自然についての一般論、更に一層深い意味に乏しい。

Thoreau の様な自己修養を欠いた彼は Emerson の哲学を伝えることなどは勿論出来なかつたし、結局 Channing は自ら天才詩人だと思つたし、親しい者も最負目に彼を天才詩人だと思つたにも拘らず、アメリカ文学史から見れば彼は 'new poet' としてより新しく、より才能ある後継者達の為に路を開く助力をしたに留まる。

(McGill, Channing of Concord, 189-190)

然し、彼の散文のあるものは学者達には非常に有用なものであり、Emerson や Thoreau の作品に対しては特に寄与しているし、後々の Thoreau 研究の為に實に大きな貢献をしているのである。

F. B. Sanborn が編集し増補した Channing の Thoreau 伝の巻末に載せた Memorial Verses は Channing の Thoreau に対する憶い出の詩を集めたものであり、その初めには 'To Henry' があり、その他の詩も Thoreau に関係する度合の差こそあれ、何れも彼が長い間もっていた記憶と優しい心情が現れている。そして彼の最もよい詩も幾つかその中にある。